

正岡子規におけるガラス戸の存在

——「墨汁一滴」を視座に——

泉 紗 英

一 はじめに

先行研究において、子規の病室に導入されたガラス戸は、子規の創作活動に大きな影響を与えたと言われている。子規は明治二十二年に当時不治の病と言われていた肺結核を患い、明治二十九年には結核菌が脊椎を冒し脊椎カリエスを発症している。歩くことや座ることさえも困難となり、ほぼ寝たきりであった子規の病室にガラス戸が導入されたのは、明治三十二年の末である。神田香織氏は「正岡子規『竹乃里歌』研究・ガラス戸の向う側」（平成二十三年三月『フエリス女学院大学日文学院紀要』十八）において次のように述べている。

それまで身体を気遣って、主に天候の優れる日中のみ見ることが可能であった外の世界を、ガラス戸が導入されることによって、何時どのような時でも（内）から眺める事ができるようになったのである。（p.36）

神田氏によると、明治三十三年の子規の作品総数は六百四十一首であり、この年は子規にとって意欲的な創作活動を見せた年である。その前年にガラス戸の導入がなされていることから、ガラス戸の導入が契機となって視界に変化が生まれ、子規の写生作品の創作を意欲的にさせたのではないかと考えられている。

また、ガラス戸の導入は子規にとってポジティブな意味で捉えられ、子規の病室に外の「世界を取り込む通路」として位置付けられてきた。島村輝氏は『臨界の近代日本文学』（「硝子戸」の中からの返書）（平成十一年五月、世織書房）において次のように論じている。

素通しのガラス板が障子にはまったことで、子規は屋外の寒さを気にせずに、庭先の様子を見ることが可能になった。それまでは病床に配慮して障子を開けて外を見ることができなかった雪の日にも、また明け方の寒い時期にも、子規はガラス越しに外の様子を見ることができるようになったのである。子規にとって

文字通り、見える世界が広がった。だから子規はここで徹底的に〈見る〉〈見える〉ことに固執している。それまで障子に隔てられて、自由に外界を〈見る〉ことが阻まれていた子規にとつて、寒さからは身を保護しながら、しかもいつでも好きな時に外界を〈見る〉ことを可能にしてくれたガラス戸は、その事実以上に象徴的な意味をもたらしたように思われる。それは〈病室〉から〈世界〉へと通じる覗き窓であり、〈病室〉の限られた空間に〈世界〉を取り込む通路として意味づけられるものだったはずだ。(pp.163-164)

子規自身もガラス戸の導入について、高浜虚子宛の明治三十二年十二月十一日付書簡で次のように記している。

硝子窓のきゝめ己に昨夜よりあらはれ非常に暖かく候。今日は終日浴光、自らガラスを拭くなど大機嫌に御座候。管笠を被つて机に向ふなど、近来になき活撥さにて、為に昼の内に原稿を書き申候。(p.450)

ガラス戸を導入したことにより、子規の病室には管笠を被るほどの光が差し込み、暖かくなった。そのおかげで子規は活発になり、自らガラス戸を拭いたり昼の内に原稿を書き終えられたりするほどだった。ガラス戸を子規に贈った虚子は、子規を主人公とする小説『柿二つ』(大正四年五月、

新橋堂)で、子規の「自らガラスを拭く」という行為について次のように書き記している。

今迄障子を開けねば見えなかつた上野の山の枯木立も、草花の枯れて突立っている冬枯の小庭も手に取るように見えた。暖かい日光は予想以上に深く射し込んで来て、病床に横たわつた儘で日光浴が出来た。

彼は蒲団をガラス障子の近処迄引張らせて、其蒲団の上起居上つて、ガラスの汚れたのを拭き始めた。

「そんな事おして又熱でも出ると大変ぞな」と老いたる母親は心配した。

彼はかまわずにガラスを拭いた。余り日がよく当るので彼は少し上気せて来た。壮健な時の楽しかった旅行の記念に何年か病室の柱に吊して置いた菅笠を思い出して、彼は其管笠を取らせて被つた。

此珍しい機嫌はいつも曇っている此一家内の空気きこを晴々とした。親子三人揃つた笑声が暫くの間聞えた。

(pp.133-134)

ここでいう彼とは子規を指す。この記述からは病体であるにもかかわらず起き上がって一心にガラスを拭く子規の様子をうかがうことができる。周囲の心配や病気である自分の身体を気にかけることなくガラスの汚れを拭いていた

という様子から、この時期の子規にとってガラス戸から見える景色がどれほど重要なものであったか推察できる。

また、永井聖剛氏は「子規の拡大する目―『墨汁一滴』に見る△写生▽の思想―」（平二十一年三月『国文学研究』百五十七）において、ガラス戸は「遮蔽物としての圧迫感」がなく、その機能は内と外とを隔てる境界としても曖昧であり、子規の病室は「閉じていながらもつねに開放」されていたと指摘している。(p.45)だから、子規の病室は「到来物」にあふれ、子規は病気の身でありながらも「想像力」によって、外からもたらされる「ミニチュア」の世界へと入り込んでいった。ガラス戸は内にながらも外を眺められるというだけではなく、外からの「到来物」を歓迎し病室の内側に吸収するという子規の姿勢を象徴するものであったと考えられる。

子規が「墨汁一滴」（明治三十四年一月十六日～七月二日『日本』の三月十四日の記事(pp.137-139)に、隣家の女の子が描いたという絵が登場する。痛みを耐えながら寝ていた子規はその絵を見て「奇想」で「実に面白い」と感じ、「うれしくてたまら」なくなっている。

この年の正月の病床にあった「地球儀」と同様、座敷に持ち込まれたこの絵も世界のミニチュアにほかならない。それを目にした子規は疑似的に小さな存在とな

り、等身大の世界から離脱し、その内部へと入り込んでゆく。(永井前掲論文)(p.50)

痛みに悲鳴をあげる身体でありながらもいま・ここでは「絵」という別の世界の内部へと入り込み、等身大の世界から離脱してゆく。子規は「想像力」によって外からもたらされる「ミニチュア」の世界に入り込み、身体は病室にいたが、意識は外界を経験するということを日常的に行っていたのである。それが殊に分かるのは、子規が死の二日前である九月十七日まで書き続けた随筆作品「病床六尺」（明治三十五年五月五日～九月十七日『日本』の記述だろう。「病床六尺」にはしばしば絵や剥製や木彫りなど様々な「到来物」について語られる記述が見られる。「四十一」（六月二十二日の記事）の次の一節からも、子規の「到来物」への関心が強かったことがうかがえるだろう。

○この日逆上甚だし。新しく我を慰めたるもの

- 一、果物彩色図二十枚
- 一、明人画飲中八仙図一卷（模写）
- 一、藪崖画花卉粉本一卷（模写）
- 一、汪淇模写山水一卷（模写）
- 一、煙霞翁筆十八皴法山水一卷（模写）
- 一、桜の実一籃
- 一、菓子麵包各種

一、菱形走馬燈一箇(p.285)

子規の部屋にある「到来物」については、「病床六尺」の「二十六」(六月七日の記事)(pp.267-269)において、贈り主などの詳細も含めて確認することができる。長いため引用は割愛して、記事に列挙されている「到来物」のみ書き出すと次のようになる。蓑、笠、伊達政宗の額、向島百花園晚秋の景の水墨、雪の林の水墨、酔桃館蔵沢の墨竹、何も書かぬ赤短冊、写真双眼鏡、河豚提灯、喇嘛教の曼陀羅、大津絵二枚、丁字簾一枚、花菖蒲、蠅取撫子、美女桜、ロベリヤ、松葉菊及び権色の草花、黄百合二本、美人草、風に折れそうな花二つ三つ、銭葵一本、薔薇、椎、檜、松、梅、ゆすら梅、茶、絵本、雑誌等数十冊、置時計、寒暖計、硯、筆、唾壺、汚物入れの井鉢、呼鈴、まごの手、ハンケチ、毛蒲団一枚。こうして書き出してみると、子規の部屋がいかに外からの「到来物」であふれていたか分かるだろう。

以上のように、ガラス戸が子規にもたらした利益は大きく、子規の創作活動においても様々な影響を与えたと考えられる。

子規自身は「新年雑記」(明治三十三年一月十日『ホトギス』)においてガラス戸の導入について語っており、その記事で「見える」という言葉を二十二回も使用している。子規にとってガラス戸を通して見える外の世界はそれほど感

動的なものであったと言える。また、「ガラス障子にしたのは寒気を防ぐためが第一で、第二には居ながら外の景色を見るため」だったが、予想していなかった第三の利益として「日光を浴びる」ことをあげており、それによってガラス戸は病気の子規に「起きて坐つて見るやうになる」ほどの変化をもたらした。(pp.424-425)

しかし、全体として見ると子規の随筆作品にガラス戸を通した景色が書かれることは少ない。子規は「写生」をすることに力を注いでいたため、先に確認したことを踏まえるとガラス戸の外を頻繁に「写生」していてもおかしくはないが、子規の随筆作品ではガラス戸の登場は少なく、また俳句作品においても、ガラス戸が導入されてから直接ガラス戸について詠んだ俳句は五句に留まる。以上のことから、ガラス戸の導入は子規にとってポジティブな意味で捉えられ続けてきたが、それだけではなく別の意味もあったのではないかという疑問が生じてくる。

ところで、子規の随筆作品の中でも「墨汁一滴」に登場するガラス戸は、いずれも外が雨の露に濡れている時と限定されていて特徴的であり、先行研究の論と異なりネガティブな側面が表れているように思われる。本稿では第二節で「墨汁一滴」の記述から子規の眼が外だけではなく内にも向けられていたことについて述べ、第三節でガラス戸が子

規にとってネガティブな意味を持っていた可能性について論じる。第四節でガラス戸の短歌や俳句について考察し、先行研究では明らかにされていない、ガラス戸が子規や子規の作品に与えた影響について明らかにしたい。

二 「墨汁一滴」に見るガラス戸の限界

先に述べた通り、子規の随筆作品では子規の精神に良い変化をもたらすことが期待されるガラス戸からの眺めはあまり登場しない。それは「墨汁一滴」においても同様である。ガラス戸が導入されたのは明治三十二年の末で、「墨汁一滴」はその約二年後に書かれた作品であるため、ガラス戸からの眺めは特別なものではなく見なれたものとなってしまうたのかもしれない。だが、病室に縛りつけられている子規にとって外界を眺められることは大きな意味を持ち、病気でありながらも病室とは別の世界へ没頭させてくれるガラス戸の存在は、見なれたからといって無視できない存在だろう。

では、「墨汁一滴」においてガラス戸が雨という限定的な場面でのみ登場するのはなぜだろうか。

それは、雨の露に濡れた対象物の色が普段より鮮やかに見えるからではないだろうか。物体が濡れるとその色が鮮

やかに見える現象は、おそらく多くの人が体験しており自明のことであろう。「墨汁一滴」においても、雨に濡れた庭の眺めには細かな色の描写が見られ、それらは子規の眼に鮮やかに映し出されていたと考えられる。ガラス戸からの眺めがいかに鮮明であったかは、「わが病室の障子にガラスを張りてガラス障子の歌よみける中に」（明治三十三年三月九日『日本』）の次の短歌から想像できる。

窓の外の小さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし（p.266）

この歌は、窓の外にいる小さな虫でさえ見ることのできるガラス戸はまさに神の力でしかできないようなものだと詠んでいる歌である。虫はそれほど鮮明に子規の眼に映し出されていて、そのことが子規にとっては神の仕業だと思えるほどのものだったのである。

以上のように、「墨汁一滴」で書かれたガラス戸からの眺めが雨に関する時に限定されるのは、雨の露によつて普段より鮮やかに映し出された庭の風景が子規の眼を惹き付け、その風景を描写する「写生」へと子規を駆りたてたからだと考えられる。

しかし、それは子規の身体の状態に左右されていたようである。「墨汁一滴」の次の記述に着目したい。

ガラス戸の外は雨後の空心よく晴れて庭の緑したたらんとす。昨日歯茎を切りて膿汁つひえ出でたるためにや今日は頬のはれも引き、身内の痛みさへ常よりは軽く堪へやすき今日の只今、半杯のココアに牛乳を加へカキマ一七また一七、これほどの心よさこの数十日絶えてなき事なり。(六月十一日の記事より抜粋)(p.207)

今日は朝よりの春雨やや寒さを覚えて蒲団引被臥し居り。垣根の山吹やうやうに綻、盆栽の桃の花は西洋葵と並びて高き台の上に置かれたるなどガラス越に見ゆ。

(四月十八日の記事より抜粋)(p.166)

春雨霏々。病牀徒然。(中略)ガラス戸の外を見れば満庭の新緑雨に濡れて、山吹は黄ようやくチカ少く、牡丹は薄紅の一輪まづ開きたり。(四月二十九日の記事より抜粋)(p.176)

四月十六日、子規は寒さを覚えて布団から出られず、ガラス戸からの眺めについては山吹、桃の花、西洋葵の名前のみ挙げ、色についての描写は見られない。その日の午後からはやや暖かくなり起き上がることができたようだが、寒い午前中はガラス戸からの眺めを眼にしても寝たきりのままで、十分に「写生」することはできなかったようである。対して「庭の緑したたらんとす」と色の描写がなされている六月十一日は、普段より痛みが軽く、数十日ぶりに気分の良い状

態だったと記されている。四月二十九日は「新緑」「黄」「薄紅」といった色の描写があり、体調に関しての記述は見られないものの、「徒然」とあるので、身体を襲う痛みは比較的軽いものだったのではないかと考えられる。

島村前掲書では、ガラス戸の導入について「寒さからは身を保護しながら、しかもいつでも好きな時に外界を(見る)ことを可能にしてくれた」と述べているが、必ずしもそうであったと言えないのではないか。子規にとつて「見る」ことは「写生」することへと直結していると考えられる。それならば、ガラス戸の外を「見る」ことも子規を「写生」へと駆り立てるものであったはずだ。しかし、ガラス戸の外に目を向けても「やや寒さを覚えて」それを「写生」することはできず、布団から起き上がることもできなかったのである。つまり、病気である子規がガラス戸の導入によつて外界を「見る」ことには限界があったと言えるだろう。

病室の三方には襖が十枚あつて茶色の紙で貼つてあるがその茶色も銀の雲形も大方はげてしまふた。左の方の柱には古笠と古蓑とが掛けてあつて、右の方の暖炉の上には写真板の手紙の額が黒くなつて居る。北側の間半の壁には坊さんの書いた寒山の詩の小幅が掛つて居るが極めて渋い字である。どちらを見ても甚だ陰気

で淋しい感じであつた。(三月十九日の記事より抜粋)

(p.143)

寝たきりの子規の視界について想像させるこの記事にガラス戸についての記述はなく、子規は三方の「どちらを見ても甚だ陰気で淋しい」と感じている。河東碧梧桐著『子規を語る』(昭和九年二月、汎文社)に掲出されている子規庵の「看取図」によると、ガラス戸は子規が過ごしていた六畳の病室の南側に設置されていたという。ガラス戸が南側に設置されていたということは、先に引用した「墨汁一滴」の三月十九日の記事では、子規は病室の南側にあるガラス戸を除いた三方の様子を記していると考えられる。つまり、この場面では子規はあえてガラス戸の方ではなく病室の内側に目を向け続けているのである。

また、「墨汁一滴」の四月三十日の記事に見られる次の歌二首に注目すると、子規は雨の日に、ただ鮮やかな景色に眼を惹き付けられていただけではないように思われる。

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花
ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寝ながら見ゆる山

吹の花(p.177)

春の日に雨が降るとガラス戸が曇って山吹の花が見えなくなることを詠んだ歌と、その曇りを拭うと寝ている状態

でもはつきりと山吹の花が見えることを詠んだ歌である。

雨が降るとガラス戸が曇ることがあり外が見えなくなるのでその曇ったガラス戸に注目し、曇っている状態とそうでない状態とを対比させて歌を詠んだのである。曇っていて見えなかったものが見えるようになるというのは、子規にとつては今まで見えていたはずのものが一時的ではあるが見えなくなっていたことを意味する。つまり、疑似的ではあるがガラス戸が導入される以前の見えない状態へと戻ってしまうことになるのである。

次の一節は子規の随筆「明治三十三年十月十五日記事」(明治三十三年十一月二十日『ホトトギス』)より抜粋したものである。

母来りて南側のガラス障子の外にある雨戸をあけ、窓掛を片寄す。外面は霧厚くこめて、上野の山も夢の如く、まだほの暗きさまなり。庭先の鶏頭、葉鶏頭にさへ霧かゝりて、少し遠きは紅の薄く見えたる、珍しき大霧なり。余は西枕にて、ガラス戸にやゝ背を向けながら、今母が枕もとに置きし新聞を取りて臥しながら読む。

(p.43)

やはり子規の眼は常にガラス戸へ向けられていたわけではなく、ある時には「大霧」や「曇り」に妨げられ、見えないう状態となることがあったようである。

以上のことから、子規はガラス戸が導入された後でも、外の世界がいつも「見える」状態ではなかったと言えるだろう。ガラス戸によって日光を六畳の病室の奥まで取り込むことが可能になったのは前述したとおりだが、それでも子規の病室は「陰気で淋しい」感じがあった。寝たきりの子規の視界は陰気な病室の内であり、ガラス戸を導入したからといって、子規の視界はいつも外界へと広がっていたわけではなかったのである。ガラス戸の導入は子規にとってポジティブな変化をもたらしたと考えられてきたが、実はそれほど単純ではなく、むしろ子規に希望を与えたからこそ、子規に現実を突きつけてしまったのではないだろうか。それは「陰気で淋しい」と思いつつも外界が見えるガラス戸の方を向いて寝るのではなく、病室の内へと眼を向け続ける子規の様子からもうかがえるだろう。外界を視界に捉えることはできても痛みに苛まれる身体を忘れることはできず、「見る」ことはできるのに「写生」することはできない現実を子規は痛感していたのである。

三 子規を外界から切り離すガラス戸

この章では、ガラス戸が子規の望みを成就させる弊害となっていた可能性について考察する。まず、「墨汁一滴」に見られる次の二つの記事に注目したい。

ガラス玉に金魚を十ばかり入れて机の上に置いてある。余は痛をこらへながら病床からつくづくと見て居る。痛い事も痛い綺麗な事も綺麗ぢや。(四月十五日の記事)(p.164)

ガラス玉に十二匹の金魚を入れて置いたら或る同じ朝に八匹一所に死んでしまった。無惨。(六月一日の記事)(p.200)

これらの記事はガラス戸の内側にいる子規のメタファーとも言えるだろう。子規はガラス玉という「ミニチュア」の世界に入り込み、「湯に入る事が出来ぬ」(三月七日の記事)(p.13)自分から離脱し、水の中を泳ぐ金魚へと意識を投じる。しかし、ある朝ガラス玉の中の金魚は十二匹のうち八匹が死んでしまっていた。ガラス戸の内側で病に苦しむ子規は、ガラス玉の中で「無惨」にも死んでしまった金魚に共感せざるを得なかっただろう。子規はあくまでガラス戸によって外界と隔てられており、自らはその内側にいるのだという意識を強く持っていたと考えられる。そのためガラス玉の中の金魚に共感を抱き、「墨汁一滴」に書き記した。子規の意識がガラス戸の向こう側だけでなく内側にも向け

られていたのは、ガラス戸の内側で病に苦しむ自己の在り様までも観察し「写生」しようとしていたからではないか。「墨汁一滴」において、ホトトギスの声が聞こえてくるはずの時期になったのに声が聞こえないので、剥製のホトトギスを眺めて歌を詠んだというものである。

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀にうち臥してこの声しばしば聞きたり。しかるに今年はいかにしけん、夏も立ちけるにまだおとづれず。剥製のほととぎすに向ひて我思ふところを述ぶ。この剥製の鳥といふは何がしの君が自ら鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ためにかく製して贈られたる者ぞ。

竜岡に家居る人はほととぎす聞きつといふに我は聞かぬに

ほととぎす今年は聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつるかも

逆剥に剥ぎてつくれるほととぎす生けるが如し一声もがも

うつ抜きに抜きてつくれるほととぎす見ればいつくし声は鳴かねど

ほととぎすつくれる鳥は目に飽けどまことの声は耳に飽かぬかも

置物とつくれる鳥は此里に昔鳴きけんほととぎすかも

ほととぎす声も聞かぬは来馴れたる上野の松につかずなりけん

我病みていの寝らえぬにほととぎす鳴きて過ぎぬか声遠くとも

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほととぎす

ほととぎす鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり

歌は得るに従ひて書く、順序なし。(五月十一日)(pp.185-186)

末延芳晴著『正岡子規、従軍す』(平成二十三年五月、平凡社)によると、子規は明治二十二年五月九日に喀血した際、「卯の花をめぐけてきたか時鳥」や「卯の花の散るまで鳴くか子規」などの句を詠み、自らをホトトギスの漢字表記である「子規」と号するようになったと言われている。(p.72)子規にとってホトトギスは特別な鳥であったはずであり、この記事に書かれている歌は単純にホトトギスの剥製を題材に詠んだだけではなく、子規自身の状態をも反映している歌があるのではないかと考えられる。例えば「ほととぎす今年は聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつるかも」の歌は、

今年ホトトギスの声を聞かないが、ひよっとしたら窓のガラスが隔てたのかもしれないという意味の歌である。この歌はホトトギスの声が聞こえてくるのをガラス戸が邪魔しているのではないかというふとした疑問を表しており、子規にとっては待ち望んでいるホトトギスの声が聞こえないのはガラス戸があるためで、ガラス戸がなければホトトギスの声が聞こえたかもしれないと推察しているのである。つまり、病室の内側と外界とを遮断しているガラス戸が、ホトトギスの鳴き声が聞こえない原因として提示されていることになる。この歌において、ガラス戸は子規のいる病室の内側と外界とを隔てる象徴的な存在として詠まれており、子規を外界から切り離す存在となっているのである。

「竜岡に家居る人はほととぎす聞きつといふに我は聞かぬに」の歌は、竜岡に家のある人はホトトギスの声を聞いたというのに自分は聞いていないという意味で、ホトトギスの声を聞いた人を羨む子規の気持ちが表示されている。「逆剥に剥ぎてつくれるほととぎす生けるが如し一声もがも」の歌は、皮を剥いでつくられてまるで生きているようなホトトギスに一声鳴いてほしいと願う気持ちを詠んだ歌である。「うつ抜きに抜きてつくれるほととぎす見ればいつくし声は鳴かねど」の歌は、そっくりそのまま抜いてつくられているのに、剥製のホトトギスを見てもいつも美しい声で鳴かないとい

う意味の歌で、ホトトギスの声を聞きたいのに聞けないという子規の切実な思いを表している。「ほととぎすつくれる鳥は目に飽けどまことの声は耳に飽かぬかも」の歌は、剥製のホトトギスは見飽きたけれども本物のホトトギスの声は聞き飽きないという意味で、この歌からは子規がどれだけホトトギスの声を聞くことを望んでいるのかがうかがえる。以上のホトトギスの声を切望する四首は、子規自身がまた元気に声をあげて歌を詠みたいという思いの表れなのかもしれない。剥製に対して生きている本物のホトトギスのように鳴いてほしいと願うのは、ほぼ寝たきりでまるで剥製になりかけている死にかけの自分に対してもう一声生命の息吹をと望む子規の願望が反映されているようにも思われる。

しかし、『日本国語大辞典』第九卷（昭和四十九年五月、小学館）(p.976)を見ると、ホトトギスは「死出の田長」という異名を持ち、冥土からの使いの鳥であると言われていることが分かる。『古今和歌集』の「いくばくの田をつくればかほととぎすしでのたをさをあさなあさなよぶ（雑体・一〇一三・藤原敏行）」や、『栄花物語』の「早苗植うる折にも鳴く郭公しでの田長とむべもいひけり（御裳着・詠み人知らず）」から、ホトトギスは梅雨時に日本へ渡ってくるため「田植えを促す勸農の鳥」であるとされていたと言える。ま

た、光悦本謡曲の『善知鳥』では「是は夢かやあさましや。

四手の田長の亡き人の、上聞きあへぬ涙哉」とあり、『譬喩尽』には「蜀魂は迷土の鳥」という表記がある。このことから、子規はホトトギスの鳴く声に生の希望を見出していったわけではなく、その反対に死の希望を見出していたと考えられる。冥土から来ると言われているホトトギスの鳴き声が聞こえない原因としてガラス戸があることを考えていたとすれば、ガラス戸は子規を延命させる役割を担っていたことになる。

「置物とつくれる鳥は此里に昔鳴きけんほとゝぎすかも」の歌は、置物用につくられた剥製のホトトギスは昔この里で鳴いていたのだなという意味で、今では置物になっても昔は美しい鳴き声をあげていたのだという感慨深い気持ちを表している。子規自身も、昔は外を自由に歩き旅行を楽しみ創作活動に励んでいたが、今となっては病の床に臥し、寝たきりで置物のようになっていく。そのような自己の在り様を剥製のホトトギスと重ね合わせていたのかもしれない。

「我病みていの寝らえぬにほとゝぎす鳴きて過ぎぬか声遠くとも」の歌には、病で熟睡できないので声が遠くともホトトギスが鳴いて通り過ぎないかという子規の期待が表れている。眠りにつくことができない夜に、たとえ遠くとも冥土

からの使いの鳥であるホトトギスの声が聞こえないものと期待する状況は、はやく苦痛から解放されて楽になりたいという子規の希望を表しているようにも思われる。

「墨汁一滴」の次の記事では、子規は夢で見た苦しむ動物たちに安らかな死を与える兔のことが忘れられないと書き記している。

昨夜の夢に動物ばかり沢山遊んで居る処に來た。その動物の中にもう死期が近づいたかころげまはつて煩悶して居る奴がある。すると一匹の親切な兔があつてその煩悶して居る動物の辺に往て自分の手を出した。かの動物は直に兔の手を自分の両手で持つて自分の口にあて嬉しさうにそれを吸ふかと思ふと今までの煩悶はやんで甚だ愉快げに眠るやうに死んでしまふた。またほかの動物が死に狂ひに狂ふて居ると例の兔は前と同じ事をする、その動物もまた愉快さうに眠るやうに死んでしまふ。余は夢がさめて後いつまでもこの兔の事が忘れられない。(四月二十四日の記事より引用)(pp.170-171)

苦しむ転げまわる動物たちは子規と同じ状況にあり、そんな動物たちに安らかな死を迎えさせてくれる兔が頭から離れないのは、子規自身も動物たちのように苦痛から解放

されて安らかに眠りたいという思いを抱いていたからに違いない。

次に引用する「墨汁一滴」の記事では閻魔と子規の対談する様子が書かれている。子規は閻魔にお迎えはいっ来るのかと質問し、延命されそうになった途端慌てて一日も早くお迎えをと願っている。

余は閻魔の大王の構へて居る卓子デッセルの下に立つて

「お願ひでござりまする。」

といふと閻魔は耳を劈くやうな声で

「何だ。」

と答へた。そこで私は根岸の病人何がしであるが最早御庁よりの御迎へが来るだらうと待つて居ても一向に來んのはどうしたものであらうか来るならいつ来るであらうかそれを聞きに來たのである、と訳を話して丁寧頼んだ。すると閻魔はいやさうな顔もせず直に明治三十四年と五年の帖面を調べたが、そんな名は見当らぬといふ事で、閻魔先生少しやつきになつて数珠玉のやうな汗を流して調べた結果、その名前は既に明治三十年の五月に帳消しになつて居るといふ事が分つた。(中略) これを聞いた閻魔様は甚だ当惑顔に見えたので、傍から地藏様が

「それでは事のついでにもう十年ばかり寿命を延べてやりなさい、この地藏の顔に免じて。」

などとしやべり出された。余はあわてて

「滅相なこと仰しやりますな。病気なしの十年延命なら誰しもいやはございません、この頃のやうに痛み通されては一日も早くお迎への来るのを待つて居るばかりでございます。この上十年も苦しめられてはやるせございません。」

閻王は直に余に同情をよせたらしく

「それならば今夜すぐ迎へをやる。」

といはれたのでちよつと驚いた。

「今夜は余り早うございますな。」

「それでは明日の晩か。」

「そんな意地のわるい事をいはずに、いつとなく突然來てもらひたいものですか。(五月二十一日の記事より抜粋)(pp.193-194)

子規が死を希う記述は「墨汁一滴」の後に書かれた「病床六尺」にも多く見られる。例として、子規の苦しみや痛みが細かに描写されている「三十九」(六月二十日の記事)を全文引用してみる。

○病床に寝て、身動きの出来る間は、敢て病気を辛しとも思はず、平気で寝転んで居つたが、この頃のやうに、

身動きが出来なくなつては、精神の煩悶を起して、殆ど毎日氣違のやうな苦しみをする。この苦しみを受けまゝと思ふて、色々に工夫して、あるいは動かぬ体を無理に動かして見る。いよいよ煩悶する。頭がムシヤムシヤとなる。もはやたまらぬので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうかうなると駄目である。

絶叫。号泣。まずまず絶叫する、まずまず号泣する。その苦、その痛何とも形容することは出来ない。むしろ真の狂人となつてしまへば楽であらうと思ふけれどもそれも出来ぬ。もし死ぬることが出来ればそれは何よりも望むところである、しかし死ぬることも出来ねば殺してくれるものもない。一日の苦しみは夜に入つてやうやう減じ僅かに眠気さした時にはその日の苦痛が終ると共にはや翌朝寝起の苦痛が思ひやられる。寝起ほど苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか、誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか。(p.283)

文末に繰り返される「誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか」という文には子規の複雑な心境が表れているように思う。苦痛から解放されるために死にたいが死ねず、殺してくれる者もないため、子規は生に縛りつけられながらひたすら苦痛に耐えるしかなかった。そのような「苦を

助けてくれるもの」は、夢に見た「一匹の親切な兎」であり、閻魔に願つた「お迎へ」であり、俳句の中で切望したホトトギスの声であつたのだろうと思われる。

子規がホトトギスの声を切望するのは、ホトトギスが冥土からの使いの鳥だと考えられていたためであつた可能性が高い。苦痛に悩まされ熟睡することも叶わなかつた子規は、はやく死を迎えて今の状態から解放されたいと強く願つていたのである。

ガラス戸は子規の俳句の中でホトトギスの声を妨げるものとして登場するため、子規を延命させる存在だつたと言えるだろう。このことから、ガラス戸は死を願う子規にとつて時にネガティブな意味を持ち得た可能性がある。また、子規がガラス戸を病室の内側と外界とを隔てる象徴的な存在として詠んでいた俳句があることから、ガラス戸は子規を外界から切り離す存在であつたとも言えるだろう。

四 ガラス戸を詠んだ俳句・短歌

この章では、子規の俳句や短歌においてガラス戸がどのように詠まれているのか確認し、これまで述べてきた観点から新たな解釈を試みたい。まず、『子規全集 第三巻 俳

句三』(昭和五十二年十一月、講談社)から明治三十二年以降に詠まれた俳句作品を見ていく。(2)

- 1 ガラス窓に鳥籠見ゆる冬こもり
明治三十二年 (P.305)
- 2 ガラス窓に上野も見えて冬籠
明治三十二年 (P.305)
- 3 鳶見えて冬あたくかやガラス窓
明治三十二年 (P.301)
- 4 寒さうな外の草木やガラス窓
明治三十二年 (P.301)
- 5 ガラス越に冬の日あたる病間哉
明治三十二年 (P.308)
- 6 ガラス戸の外を飛び行く胡蝶哉
明治三十三年 (P.329)
- 7 山吹と見ゆるガラスの曇哉
明治三十三年 (P.334)
- 8 ホトゝギス月ガラス戸ノ隅ニアリ
明治三十三年 (P.573)
- 9 ガラス戸や暖爐や庵の冬構
明治三十三年 (P.366)
- 10 ガラス越に日のあたりけり福壽草
明治三十三年 (P.316)

11 山吹の雨やガラスの窓の外

明治三十四年 (P.392)

12 ガラス越しに灯うつりたる牡丹かな

明治三十四年 (P.479)

13 暖爐タクヤ雪粉ヤトシテガラス窓

明治三十五年 (P.433)

1 ガラス窓に鳥籠見ゆる冬こもり

この句に登場する鳥籠は「墨汁一滴」の三月七日の記事に出てくる「ある人が病牀のなぐさめにもと心がけて鉄網の大鳥籠を借りて来てくれたのでそれを窓先に据ゑて小鳥を十羽ばかり入れて置いた」(p.130)鳥籠のことだと思われる。ガラス戸に鳥籠が見えるのは鳥籠がガラスに反射して映っているということであり、その鳥籠の中の鳥のように子規が冬こもりしているという状況を詠んだ句である。子規はガラス戸の内側で鳥籠の中に縛りつけられたまま冬こもりする鳥に自己を重ね合わせていると考えられる。

5 ガラス越に冬の日あたる病間哉

この歌はガラス戸を通して冬の日の光が病室に差し込んでいる様子を詠んだ句である。冬の日は弱く、その弱い日の光がガラスを通すことよってさらに弱くなり、それが病室に差し込んでいくというのは、どこか寂しさを感じる光

景である。ガラス戸のおかげで日の光は取り込めるもののそれは弱められており、実際の日の光ほど強くはない。しかし、第二節で確認したように病気である子規にとってその光はのぼせる程であった。弱い光が病室に差し込んでいる様子は、病気である子規の儂い生命と重なる部分があるが、その弱い光ですら子規にとってはのぼせる程であり、外界の力強さと内側の儂さとが想像される句である。

7 山吹と見ゆるガラスの曇哉

ガラス戸によって見えていた外界が冬になり曇りで見えなくなってしまう状況で、子規はその曇りの中にかつて見えていた山吹を想像している。見えていたはずの外の景色は見えなくなり、子規の視界がガラス戸を導入する以前に戻ったものの、外の世界を意識させるガラス戸は依然として存在し続ける。この句はガラスの曇りを山吹に見立てるといふ遊び心を感じさせると同時に、見えない外の世界を想像する子規の寂しさも感じさせる句である。

また、前掲の「わが病室の障子にガラスを張りてガラス障子の歌よみける中に」の短歌においても似たような状況を詠んだ歌がある。

雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えずけり

暁の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ
(p.266-267)

この二首はいずれもガラス戸の外を見ようとすのだが、ガラス戸が曇っているためにそれが叶わない状況を詠んでいる。後者の歌では人にガラスの露を拭わせており、いつでも見られるようになったはずの外の景色を、人に頼まなければ満足に見られない不自由さを感じさせる。

8 ホトトギス月ガラス戸ノ隅ニアリ

ここに出てくる「ホトトギス」は「墨汁一滴」にも登場した剥製のホトトギス(p.185)だろう。月に照らされたガラス戸の隅に剥製のホトトギスの影が投影されている光景を詠んだ句である。子規はこの照らし出されたホトトギスの影に自己を見出していたのではないだろうか。月明かりに照らされて隅に映し出される影に、ガラス戸の内で横たわる小さな自分の存在を投影していた可能性が考えられる。

次に、ガラス戸が導入される以前と以降で子規の「ガラス窓」の詠み方がどのように変化したのか見ていきたい。明治三十二年以前に「ガラス窓」について詠まれた句をいくつかあげてみる。(3)

1 灯取虫の羽はたきするやからす窓

(明治二十一年)

『季語別 子規俳句集』(p.240)

2 猫の恋がらす障子に無分別

(明治二十五年)

『子規全集 第一巻 俳句一』(p.43)

3 木枯らしに火影おそろしがらす窓

(明治二十五年)

『季語別 子規俳句集』(p.467)

4 野が見ゆるガラス障子や冬籠

(明治三十一年)

『子規全集 第三巻 俳句三』(p.225)

1 灯取虫の羽はたきするやからす窓

明り取りに集まる虫の羽音と聞くと激しい音を想像できる。明り取りにつられてガラス戸に激しくぶつかってくる虫たちの生命を感じさせるような句で、明治三十二年以降に詠まれた句とは趣が異なるように思われる。

2 猫の恋がらす障子に無分別

この句はガラス越しにも猫の激しい鳴き声が聞こえてくる様子を想像させる句で、先の句と同じくエネルギーを感じさせる句である。

3 木枯らしに火影おそろしがらす窓

強い風に揺れる火の影がガラスにうつり、恐ろしいもののように見える様子を詠んだ句である。明治三十二年以降の「鳥籠」や剥製の「ホトトギス」がガラス戸にうつって

る様子を詠んだ句では、病室にいる子規と重なる点があり、ガラス戸が子規の現状を痛感させるような存在となっていた。しかし、この句はあくまでガラス戸にうつった火が恐ろしく見えるという自然現象の面白さを詠んでおり、ここではガラス戸はその現象を起こす一つの道具にすぎないと言えるだろう。

4 野が見ゆるガラス障子や冬籠

この句は明治三十二年以降に詠まれた句と似たような詠まれ方をしており、外側と内側にいる人物との対比がなされている。ガラス戸を設置する以前からこうした句を詠む感性があつたからこそ、ガラス戸の設置によつてその対比が現実のものとなつた時、その寂しさが痛感され、それを繰り返し詠むようになったとも考えられる。

以上のことから、明治三十一年以前と以降で「ガラス窓」の詠まれ方は異なる部分があると言えるだろう。ガラス戸が導入される以前では、生物たちの生命エネルギーを感じさせるような句や、ガラス戸の効果によつて起きる自然現象などに焦点をあてた句などが詠まれていた。一方、ガラス戸が導入されて以降の句は、病室にいる子規と外界とを意識させるような存在としてガラス戸が詠まれ、どこか寂しさを感じさせる句が多い。また、明治三十二年を境にガラス戸について詠んだ句が多くなっていることから、子規の

ガラス戸への見方や考え方、興味などが変化しただろうことがうかがえる。子規はガラス戸が導入される以前はガラス戸を単純な機能的な道具として詠んでいたが、導入されて以降はガラス戸に隔てられた自身と外界とを意識して詠むようになったと考えられる。つまり、子規はガラス戸が導入されたことによって、病室に縛りつけられている自分と外の世界とをよりはつきりと意識するようになったと言えるだろう。

五 おわりに

これまでの先行研究では、子規の病室にガラス戸が導入されたことはポジティブな意味で捉えられ、子規の視界に大きな変化をもたらして創作活動へと意欲的に駆り立たせたと言われてきた。そして、ガラス戸は病室の内にいる子規と外界とをつなぐ通路としての役割も果たしたと考えられていた。しかし、必ずしもそうであったとは言えない可能性が出てきた。ガラス戸が子規にもたらす効果には限界があったと考えられる。ガラス戸は子規の六畳の病室の奥まで光を取り込み、子規自身も想像していなかった日光を浴びるといふ利益をもたらしたが、「墨汁一滴」の記述を見ると、

部屋の三方は「甚だ陰気で淋しい」感じがあった。そして、身体の痛みが普段より軽くなければ子規の視界は病室の内へと戻り、たとえ外へ向けられたとしても「写生」をすることは困難であった。子規がガラス戸の外だけでなく内側へも目を向けていたのは、ガラス戸の内側にいる自分自身を意識し「写生」しようとしていたからではないかと考えられる。それは「墨汁一滴」の五月十一日の記事に記されている、ホトトギスの剥製を眺めながら詠んだ歌を見れば明らかである。(p.185)子規は剥製のホトトギスにほぼ寝たきりの状態である自身を重ね合わせていた。また、ガラス戸を病室と外界とを隔て遮断する象徴的な存在として描き出し、ガラス戸があるからこそホトトギスの鳴く声が聞こえないのではないかと疑問を抱いた。ホトトギスは冥土からの使いの鳥と言われており、子規にとってホトトギスの鳴く声はあの世からの「お迎え」を予感させるものだったのかもしれない。子規はそのような意味を持つホトトギスの鳴く声を希求していた。一刻も早く病の苦痛から解放され、死を迎えたいと切実に願っていたのである。

そのような子規を生へと駆り立たせたガラス戸はいわば死を妨げるものだった。いよいよ重症化して死を望むようになった子規の前に立ちはだかり、子規の病室に光を届け、外の世界を多少の不自由さはあるものの見せ続けた。それ

によって子規は病気である自己の在り様を「墨汁一滴」や

「病床六尺」などで書き記すことができたのである。

子規は藤井乙男宛明治二十八年十一月二十四日付書簡に「文学と討死の覚悟に御座候」(p.630)と書き残している。この言葉通り、子規にとって文学は運命共同体であったと言っても過言ではない。文学こそが子規の生であり、書くことそのものが子規のアイデンティティだった。晩年の子規は、古嶋一雄宛明治三十五年五月二十日頃付書簡の中で、自分の生命は「病床六尺」にあると言っており、新聞に「病床六尺」がないと泣き出すほどだった(p.646-647)という。

ガラス戸は、子規を生命とも直結する文学へと駆り立てたが、それと同時に子規の切実な望みである死を遠ざけ、子規を外界から切り離して六畳の病室の内に閉じ込めた。そして、不安定な養分を子規に与えながら、病室の内にいる自己やその病、苦痛などに容赦なく向き合わせるものだったのである。子規はそのようなガラス戸を時には外の景色を見せてくれる神の仕業のようなものだと言ひ、またある時には自らを外界から切り離す存在として詠んだ。病に翻弄され、まさに生と死の間で揺れ動いていた子規にとって、ガラス戸はポジティブな側面と、ネガティブな側面を持つものであったと言えるだろう。

注

- (1) 高濱虚子『柿二つ』(平成十九年八月、講談社)より引用。
- (2) 1、2の句の初出は明治三十二年十二月四日『日本』『冬籠』。
- 3、4の句の初出は明治三十四年二月二十七日『日本』『冬籠』。
- 5の句の初出は明治三十四年二月二十五日『日本』『冬の日』。
- 6の句の初出は明治三十三年五月三十日『ホトトギス』『橋(春季結)・選者吟』。7の句の初出は明治三十三年五月三十日『虫籠』『一日一詠・四月二十六日(雨、硝子戸に露あり)』。8の句は明治三十三年六月十日付岡三郎宛書簡中に見える。9の句の初出は明治三十三年九月三十日『ホトトギス』『水滸傳雜詠』。
- 10の句の初出は明治三十三年一月三十日『虫籠』『福壽草』。11の句の初出は明治三十四年四月二十一日『日本』。12の句は抹消句。初出は大正十四年十一月一日『日本及日本人』。13の句は明治三十六年一〜二月頃付河東兼五郎宛書簡中に見える。
- (3) 1の句は『子規全集 第九卷』(昭和五十二年九月、講談社)より引用、2の句は抹消句で、『子規全集 第一卷』(昭和五十年十二月、講談社)より引用、4の句の初出は明治三十二年十一月二十七日『日本』『冬籠』である。

参考文献

- 河東碧梧桐著『子規を語る』(平成十四年六月、岩波書店)
神田香織「正岡子規『竹乃里歌』研究…ガラス戸の向う側」(平成

二十三年三月『フェリス女学院大学日文学院紀要』十八)

めた。

(いずみ・さえ 令和三年度卒業生)

島村輝『臨界の近代日本文学』(平成十一年五月、世織書房)
末延芳晴『正岡子規、従軍す』(平成二十三年五月、平凡社)

高浜虚子『柿二つ』(平成十九年八月、講談社)

永井聖剛「子規の拡大する目」『墨汁一滴』に見る△写生▽の思

想」(平成二十一年三月『国文学研究』百五十七)

『季語別子規俳句集』(昭和五十九年三月三十一日、松山市立子規記

念博物館)

『日本国語大辞典』第九卷(昭和四十九年五月、小学館)

付記

子規の俳句の引用は『子規全集 第一卷 俳句一』(昭和五十二年十二月、講談社)、『子規全集 第三卷 俳句三』(昭和五十二年十一月、講談社)による。ただし、論文16ページの1と3の俳句は『季語別子規俳句集』(昭和五十九年三月三十一日、松山市立子規記念博物館)による。また、子規の短歌の引用は『子規全集 第六卷 短歌歌会稿』(昭和五十二年五月、講談社)、「墨汁一滴」・「病床六尺」の引用は『子規全集 第十一卷 随筆一』(昭和五十年四月、講談社)、「新年雑記」・「明治三十三年十月十五日記事」の引用は『子規全集 第十二卷 随筆二』(昭和五十年十月、講談社)、子規の書簡の引用は『子規全集 第十九卷 書簡二』(昭和五十三年一月、講談社)による。その他、文献の引用に際し適宜ルビ等を略し旧字を新字に改